

e ラーニングおける受講状況の分析: 学習行動の7分類を用いて

An Analysis of Access Log in Online Course based on 7 Learning Behavior Categories

高橋 暁子, 金西 計英

Akiko TAKAHASHI, Kazuhide KANENISHI

徳島大学総合教育センター

Center of University Education, The University of Tokushima

＜あらまし＞本稿では、フルオンライン授業における LMS のアクセスログをもとに学習者の受講状況を分析した。その結果、先行研究と同じく、最初の課題提出でのドロップアウトが多いことや、やる気減退タイプなどの様々なタイプがあることを確認した。

＜キーワード＞ e ラーニング, オンライン授業, アクセスログ, LMS, ドロップアウト

1. はじめに

一般的に、新しい学習環境で学習を始める前に、学習の準備を行う「オリエンテーション」が実施されることが多い。当然、e ラーニングの前にもオリエンテーションはよく行われている。筆者らの所属大学でも、すべての授業を e ラーニングで行うフルオンライン授業の前に、対面オリエンテーションを実施していたが、学生の出席率が悪いなどの課題もあった。そこでより学生の実態に合ったオンライン・オリエンテーションを行うための基礎調査の1つとして、本稿では過去に実施したオンライン授業の受講状況を整理した。

2. 対象コースと受講者の概要

分析対象としたオンライン授業は、2013 年度後期開講の全学共通教養科目「知の探訪」である。科目内容は、様々な研究紹介を通じて大学での研究方法等を学ぶものである。開講前に LMS へのログイン方法等を説明する簡単な対面オリエンテーションを実施し、その後、オムニバス形式で全 15 回のオンライン授業を行った。オンライン授業の開講期間は 2013 年 10 月 3 日～2014 年 2 月 5 日で、2 月 6 日に対面試験を実施した。

毎回のオンライン授業は、20 分程度の VOD 数本と 1 つの小レポートで構成されている。毎週、授業 1 回分のコンテンツが公開され、1 週間は VOD 視聴期間（締め切り後も視聴可能）、さらに 1 週間後にレポート提出を締め切る。レポート提出は出席に相当するもので、学生は 3 分の 2 以上のレポート提出で試験の受験資格が得られる。

履修登録者 23 名中 17 名は 1 年生であった(表

1)。総合科学部は所属学生数が少ないことから、おおむね学部への偏りはないと考えられる。最終的に試験の受験資格を得た学生は 10 名 (43%) で、全員が試験に合格し、単位を取得した。

表 1 受講者の年次と所属学部

	総合科学部	工学部	医学部 +歯学部	計
1 年	1	7	9	17
2 年	1	1	0	2
3 年	2	1	1	4
計	4	9	10	23

3. 分析方法

受講状況を、LMS のアクセスログから各回の VOD 視聴と小レポート提出の視点で整理した。なお VOD は締め切り後の視聴および数本ある VOD の途中までの視聴も「視聴」として数えた。

4. 結果と考察

4. 1. 全体傾向

VOD 視聴とレポート提出および対面機会への出席状況を図 1 にまとめる。履修登録者 23 名のうち、対面オリエンテーションを欠席したのは 4 名 (17%) であった。第 1 回から第 3 回まで VOD 視聴・レポート提出が減少し、その後は試験まで横ばいとなっている。オリエンテーションに出席した 19 名中、6 名 (32%) が第 1 回のレポートを提出しなかった。これは、最初の課題提出時に 38% がドロップアウトし、以降は横ばい傾向のある英国オープンユニバーシティ (Simpson 2013) などの状況と似ている。

4. 2. 受講タイプ

締め切り設定など授業形態が若干異なるが、個人状況を大まかに把握するため、合田ら(2013)の学習行動の7分類への当てはめを試みた。

(ア) アクセスなし(5名)

オリエンテーションを欠席した4名は、アクセスログもなかった。一方、オリエンテーションは出席したが、アクセスログがない学生が1名いた。

(イ) やる気減退タイプ(5名)

第1回または第2回まではレポートを提出したが、以降はアクセスログがない学生は3名いた(三日坊主型)。一方、第7回あたりまでレポートを提出し、中盤離脱して第14回または第15回にVODを視聴したものの試験の受験資格を得るには至らなかった学生が2名いた(U字型)。

(ウ) 山型タイプ(4名)

第5回前後のコース途中から連続でレポートを提出するようになった学生が4名おり、うち3名は第12回前後でドロップアウトした。1名は第15回まで継続したため、中盤追い上げタイプと言えるかもしれない。しかし、いずれもドロップアウト率が高い「先延ばし傾向(向後ほか, 2004)」を持つ学生に当たると思われる。

(エ) 学習習慣(コツコツ)タイプ(9名)

残り9名はほぼ毎週レポートを提出した。

以上から、(ア)と(イ)の三日坊主型は全くアクセスしないか序盤に受講をやめているため、「試し受講」や「eラーニングの方が簡単だ」といった誤解(松田・原田 2007)を持つ学生が含まれている可能性がある。一方で、(イ)(ウ)は

本分析だけではドロップアウトの要因は推察しにくい、レポート提出を1度は行っていることから、ICTスキルよりは、学習計画を立てるなどの自己調整学習スキルの不足が考えられる。また、特に(ウ)に見られる初動の遅れは、オンライン・オリエンテーションによる学習準備によって、改善できる可能性があるのではないかな。

5. おわりに

本稿では、フルオンライン科目のアクセスログをもとに受講状況を分析した。先行研究と同じく、最初の課題提出の未提出者が多いことや、様々な受講タイプがあることが分かった。今後アクセスログ以外の分析なども踏まえ、オンライン・オリエンテーションの設計を行いたい。

参考文献

- 合田美子, 山田政寛, 松田岳士, 加藤浩, 齋藤裕, 宮川裕之(2013) eラーニングにおける学習行動の分類. 日本教育工学会第29回全国大会発表論文集, 867-868
- 向後千春, 中井あづみ, 野嶋栄一郎(2004) eラーニングにおける先延ばし傾向とドロップアウトの関係. 日本教育工学会研究報告集 2004(5), 39-44
- 松田岳士, 原田満里子(2007) eラーニングのためのメンタリング: 学習者支援の実践. 東京電機大学出版局, 東京
- Simpson, O. (2013). Supporting students for success in online and distance education. New York: Routledge.

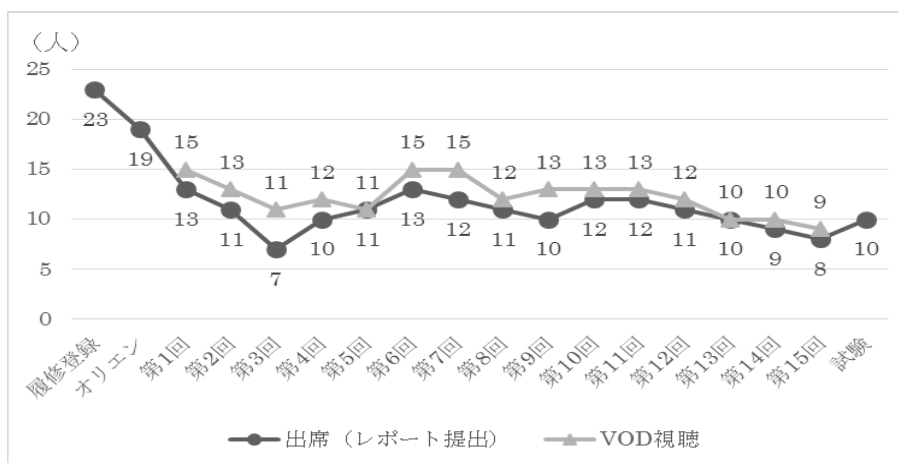


図1 各回の出席者数(レポート提出者数)とVOD視聴者数